

Zoo and Wildlife News

No.56 2023.6



ズー・アンド・ワイルドライフニュース No.56

Contents

第 16 回アジア保全医学会大会開催案内	1
第 29 回日本野生動物医学会大会のご案内	2
認定専門医協会から	3
各種委員会から	5
学生部会から	6
学会員から	11
動物園・水族館から	14
リレー連載	17
現場レポート	23
書籍紹介	27



JAPANESE SOCIETY OF
日本野生動物医学会
ZOO AND WILDLIFE MEDICINE

日本野生動物医学会

Japanese Society of Zoo and Wildlife Medicine

目的

1. 野生動物および動物園動物に関する動物医学研究の学術交流と発展
2. 野生動物医学の卒前・卒後教育
3. 傷病野生動物診療に関わる臨床および救護技術の交流と発展
4. 野生動物の正しい知識と理解のための一般市民への普及啓発
5. 野生動物医学および野生動物保護に関する国際交流と推進

役員

会長	大沼 学	((国研)国立環境研究所)[統括]	評議員	大池辰也	(南知多ビーチランド)
副会長	高見一利	(豊橋総合動植物公園)[統括補佐]		大野晃治	(男鹿水族館GAO)
副会長	田島木綿子	(国立科学博物館)[統括補佐]		岡本 実	(酪農学園大学)
顧問	坪田敏男	(北海道大学)[アドバイザー]		落合謙爾	(岩手大学)
	羽山伸一	(日本獣医生命科学大学)[アドバイザー]		川上茂久	(群馬サファリワールド(株))
	岸本真弓	((株)野生動物保護管理事務所関西分室)[アドバイザー]		木戸伸英	(横浜市立金沢動物園)
	須藤明子	((株)イーグレット・オフィス)[アドバイザー]		木村順平	(ソウル国立大学)
事務局長	柳川洋二郎	(北海道大学)[庶務]		鯉江 洋	(日本大学)
理事	和田新平	(日本獣医生命科学大学)[専門医協会]		後藤拓弥	((株)野生動物保護管理事務所)
	齊藤慶輔	(猛禽類医学研究所)[広報]		鳥本 樹	(日本獣医生命科学大学)
	浅野 玄	(岐阜大学)[経理・基金担当(基金担当)]		下鶴倫人	(北海道大学)
	佐々木基樹	(帯広畜産大学)[学術・教育]		進藤順治	(北里大学)
	楠田哲士	(岐阜大学)[学会誌編集]		進藤英朗	(下関市立しものせき水族館「海響館」)
	外平友佳理	(SALU)[ニュースレター編集]		鈴木正嗣	(岐阜大学)
	佐藤雪太	(日本大学)[感染症対策]		竹田正人	(宮崎市フェニックス自然動物園)
	岩尾 一	(新潟市水族館)[臨床・普及啓発]		竹鼻一也	((有)市原ぞうの国)
	長嶺 隆	(NPO法人どうぶつたちの病院沖縄)[野生動物保全・福祉]		田中悠介	(仙台商みの杜水族館)
	木下こづえ	(京都大学野生動物研究センター)[国際交流・アジア保全医学会]		チェンバーズ ジェームズ	(東京大学)
幹事	石井千尋	(猛禽類医学研究所)[庶務、経理・基金担当(経理担当)]		寺沢文男	(新江ノ島水族館)
	植田美弥	(横浜市立金沢動物園)[専門医協会]		中川真梨子	(群馬サファリワールド(株))
	近藤圭佑	((株)海の中道海洋生態科学館)[広報]		中津 賞	(中津動物病院)
	川瀬啓祐	(日立市かみね動物園)[学術・教育]		成島悦雄	((公社)日本動物園水族館協会)
	加藤卓也	(日本獣医生命科学大学)[学会誌編集]		根上泰子	(環境省)
	井上春奈	(わんぱーくこうちアニマルランド)[ニュースレター編集]		伴 和幸	(豊橋総合動植物公園)
	野田亜矢子	(広島市安佐動物公園)[感染症対策]		藤井 啓	(OATアグリオ(株))
	水主川剛賢	(宮崎市フェニックス自然動物園)[臨床・普及啓発]		松岡由子	(滋賀県立琵琶湖博物館)
	渡邊有希子	(猛禽類医学研究所)[野生動物保全・福祉]		松林 誠	(大阪公立大学)
監事	藤原摩耶子	(京都大学野生動物研究センター)[国際交流・アジア保全医学会]		松本令以	(兵庫県立コウノトリの郷公園)
	石塚真由美	(北海道大学)[監査]		皆川智子	((一財)沖縄美ら島財団)
	山口剛士	(鳥取大学)[監査]		宮下 実	(宇部市ときわ動物園)
評議員	赤木智香子	(ラプター・フォレスト)		向井 猛	(札幌市保健所動物管理センター)
	浅川満彦	(酪農学園大学)		村田浩一	(日本大学)
	石名坂 豪	((公財)知床財団)		森田菜摘	(横浜市立よこはま動物園ズーラシア)
	伊藤圭子	(奄美いんやま動物病院)		森光由樹	(兵庫県立大学)
	伊東隆臣	(海遊館)		柳澤牧央	((株)マリンパレス水族館うみたまご)
	伊藤英之	(京都市動物園)		山上達彦	(長野市茶臼山動物園)
	岩田恵里	(岡山理科大学)		米田久美子	((一財)自然環境研究センター)
	宇根有美	(岡山理科大学)		綿貫宏史朗	(京都大学野生動物研究センター)
	遠藤秀紀	(東京大学総合研究博物館)			

会員

本会会員は正会員、学生会員、団体会員および賛助会員とする。入会を希望するものは所定の入会申込書に所要事項を記入し、会費を添えて本会事務局に申し込む。会費は以下のとおりである。

正会員：	9,000 円
学生会員：	3,000 円
団体会員：	70,000 円
賛助会員：	一口 30,000 円

COVER PHOTO

Klipspringer (*Oreotragus oreotragus*)
撮影：須藤一成 (㈱イーグレット・オフィス)

本会会員の権利は以下の通りである。

1. 本会発行の学術定期刊行物の受領
2. 本会発行の刊行物への投稿
3. 本会主催の集会への出席と研究発表
4. 総会への出席および本会の運営への参加
5. 本会役員の見学権と被選挙権。ただし、この権利は正会員に限られる。

事務局：北海道大学大学院獣医学研究院

臨床獣医学分野 繁殖学教室内

Tel・Fax 011-706-5234

E-mail wildmed@vetmed.hokudai.ac.jp



第16回アジア保全医学会大会開催案内

国際交流アジア保全医学会委員会 木下こづえ（京都大学野生動物研究センター）

昨年から、アジア保全医学会は現地参加が再開しました。今年度は、韓国の済州（チェジュ）島で開催されます。

アジア保全医学会は、アジアを中心に欧米の方々など、さまざまな国や地域からの参加があるのが特徴です。大学、動物園・水族館、NPO/NGOなど参加者の専門性も多様性に富んでおり、野生動物や飼育動物に関する多種多様な分野の情報交換がなされます。また、アジア各国の学生たちが積極的に参加しているのも魅力の一つです。

済州島は、大変魅力的な島で、イルカの保全活動なども盛んな場所です。海外渡航が再開された今日この頃。まずはお隣の国・韓国から、海外交流を再開しませんか？

今年度は、学会に先立って、7月8日土曜に本委員会主催の日韓交流イベントを開催予定です。詳細は決まり次第、学会メーリングリストにて周知させていただきます。ぜひ、奮ってご参加ください！

■（仮）ASCMに繰り出そう！日韓交流イベント

Let's go to ASCM ~ building the bridge between Korea and Japan ~

日程：7月8日（土）午後

開催方法：オンライン

参加登録：5月ごろ

講演者：韓国側3名（1名学生）、日本側3名（1名学生）

■第16回アジア保全医学会

日程：2023年10月9日～13日

場所：韓国済州島

開催方法：現地参加のみ（予定）

参加登録：4～8月

【概要（予定）】

• Day1:

Pre-congress: Workshop

Theme: Avian surgery, Marine Mammal necropsy, Avian necropsy

• Day 2:

Keynote: 「Strengthen Partnership」

Prof. Andrew Peter (Charles Sturt University, Australia, Wildlife Disease Association president)

Plenary session:

Current works and future for wildlife disease management

Dong-In Shin (President of National Institute of Wildlife Disease Control, Korea)

• Day3:

Open session

1. Theme: Effective emergency response methodology for wildlife disasters

Prof. Michael Ziccardi (University of California, Davis, USA)

2. Theme: Restoration or reproductive issue

Prof. Heribert Hofer (or a substitute) (Director of Leibniz Institute for Zoo & Wildlife Research, Freie Universität Berlin, Germany)

General Session (tentative)

1. Quantitative epidemiology

Prof. Beatriz Lopez, University of California, Davis, USA

2. Avian influenza

Prof. Walter Boyce, University of California, Davis, USA

3. Wildlife rescue center in Korea

Prof. Yoon Young-Min, Jeju National University, Korea

4. Bear rehabilitation in Vietnam & Cambodia

5. Bear Sanctuary issue

6. Wildlife Rescue in Hong Kong

Dr. Alex Grioni, Kadoorie Farm and Botanic Garden, Hong Kong

7. Asiatic Bear Restoration in Korea

Dr. Jungjin Yang (or Prof. Donghyuk Jeong), National Park Research Institute (or Chungbuk National Univ)

8. World Organisation for Animal Health (WOAH) joint

など

最新の情報は以下のURLをチェックしてください。

アジア保全医学会韓国済州島大会のURL

<http://www.ascminfo.org/jeju2023>

以上、みなさまのご参加お待ちしております！

第29回日本野生動物医学会大会のご案内（第1報）

小澤 真（鹿児島大学）

第29回日本野生動物医学会大会を以下の要領で開催いたします。皆様のご参加を心からお待ち申し上げます。

会議名称：第29回日本野生動物医学会大会

会期：2023年9月22日（金）～9月24日（日）

会場：鹿児島大学 郡元キャンパス 学習交流プラザほか

〒890-0065 鹿児島県鹿児島市郡元1丁目21番24号

大会長：福守 朗（鹿児島市平川動物公園 園長）

事務局長：小澤 真（鹿児島大学 共同獣医学部 准教授）

連絡先：第29回日本野生動物医学会大会事務局

〒890-0065 鹿児島県鹿児島市郡元1丁目21番24号

鹿児島大学 共同獣医学部 小澤 真

TEL: 099-285-3651（研究室直通）

E-mail: a2130.vet@gmail.com

参加費振込先：ゆうちょ銀行 九〇八支店

店番；908 口座番号；5023651

口座名；日本野生動物医学会 ニホンヤセイドウブ
ツイガツカイ

大会ホームページ：<https://society.zvs.jp/2023jjzwm/>

- 全ての登録や諸手続きは大会ホームページをご参照ください。
- 研究発表登録：大会ホームページにて受付
※期間：8月7日（月）まで
- 各種委員会申込：大会ホームページにて受付
※期間：8月7日（月）まで
- 自由集会申込：大会ホームページにて受付
※期間：7月10日（月）まで
本学会の学会員（学生会員を含む）のみ。
応募多数の場合は先着順といたします。

大会日程：

9月22日(金)	午後	各種委員会，理事会，評議委員会
		受付，開会式
		口頭発表
9月23日(土, 祝)	午前	自由集会
		ポスター発表
		総会
9月23日(土, 祝)	午後	口頭発表
		自由集会・学生集会
		ポスター発表（コアタイム含む）
9月24日(日)	午前	受付
		口頭発表
		自由集会
		ポスター発表
		発表授賞式，閉会式
午後	公開市民講演会	

演題登録〆切：2023年8月7日（月）

参加登録〆切：事前登録 2023年8月31日（木）

参加費振込：事前登録

2023年8月31日（木）振込を確認後参加登録完了とする。

銀行振り込みのみ，Webからのカード決済等はなし。

8月31日以降は，当日登録として会場で参加費を現金でお支払い下さい。



認定専門医協会から

2023 年度日本野生動物医学会認定専門医試験の実施について

日本野生動物医学会認定専門医協会 和田新平

2023 年度日本野生動物医学会認定専門医試験を下記の 4 段階で実施します。

①書類審査

提出された書類を元に協会が厳密な書類審査を行います。その結果、受験資格を満たしていないと判断した場合は、その具体的な理由を記載した審査結果を、提出書類とともに返却します。

②動物園動物医学，水族医学，野生動物医学，野生動物病理学・感染症学，鳥類医学，各分野からそれぞれ 8 問ずつ計 40 問の 5 択あるいは穴埋め形式試験（一次試験）。

③希望する専門分野に関する筆記試験（二次試験・筆記）。

④希望する専門分野に関する実地面接試験（二次試験・実地面接試験）

※一次試験および二次筆記試験は対面にて実施するが，二次実地面接試験はリモートでの実施の選択も可能です。必要書類提出時にメールにて和田ないし植田までご連絡下さい（メールアドレスは本稿末参照）。

受験希望は受験要項を参照し受験準備を実施してください。なお，受験要項，試験用参考書一覧，受験申込用紙は以下で参照およびダウンロード可能です（2020 年 12 月 30 日にアップされた資料をご参照下さい）。

<https://sites.google.com/a/jczwm.com/information/>

別表 1 評点基準

項目	点数	備考
野生動物医学会会員歴	3 年以上 20 点	3 年は必須
野生動物・動物園 経年歴* ¹	5 年以上 30 点	5 年は必須
野生動物医学関連論文，その他* ²	筆頭 10 点 / 報 共著 5 点 / 報 (総計 60 点まで)	2 報は必須，内 1 報は野生動物医学会誌
日本野生動物医学会発表	筆頭 10 点 / 回 共同 5 点 / 回 (総計 40 点まで)	2 回は必須（共同も含む） 同等のワークショップ等も含む
野生動物医学に関連した社会貢献* ³	総計 20 点まで	
博士号	20 点	野生動物医学関連のテーマ
	総計 100 点以上	

*¹ 経年歴は獣医師免許取得後の当該職域における経年歴とする。大学学部生時代およびそれ以前の経験についてはこれに含めない。

*^{2,3} 内容判定は運営委員会（試験委員会）で判断する。

2023 年度日本野生動物医学会認定専門医試験受験要項

1. 受験資格者：

1) 下記の日本野生動物医学会認定専門医試験受験資格規定に合致する者。

日本野生動物医学会認定専門医試験受験資格規定

- 日本国内の獣医師資格を有し，獣医師としての十分な道徳観と倫理観をもつ者であること。
- 出願時に 3 年（36 ヶ月）以上継続して日本野生動物医学会会員であること。
- 野生動物医学に関連した専門的研究または職業に従事した年数が総計で 5 年（60 ヶ月）以上であること。
- 筆頭著者論文 2 報以上（内 1 報は野生動物医学会誌）であること。
- 別表 1 の評点基準による合計点が 100 点以上であること。
- 学会活動，研修会参加，論文発表などを行っていること。

2. 提出書類：

下記書類を日本野生動物医学会認定専門医事務局宛てに郵送して下さい。

- 所定の受験申込フォームに必要事項を記載したもの。
- 自身の関わった主要な学術論文の発表年，題名，著者名（複数の場合は申請者に下線を付す），発表誌名を取りまとめた一覧表（書式自由）を 2 部，および各学術論文の表紙および要

旨をコピーしたもの各2部。

- 3) 自身の関わった主要な学会発表の発表年、題名、著者名（複数の場合は申請者に下線を付す）、発表学会名を取りまとめた一覧表（書式自由）を2部、および各講演要旨をコピーしたもの各2部。
- 4) 野生動物医学に関連した社会貢献についての自己アピール（1,000字程度）2部。
例：野生動物医学分野に関連した一般向けの活動（講演、執筆、救護ボランティアなど）、SSCやショートコースなどの参加、海外の野生動物医学に関する資格の取得等
- 5) 学位を取得した者はその学位論文の和文要旨のコピー2部。
- 6) 4cm × 5cm 大の顔写真（裏面に氏名記載）を2葉。

書類郵送先：

〒180-8602
東京都武蔵野市境南町1-7-1
日本獣医生命科学大学 水族医学研究室 和田新平

3. 締め切り：

2023年7月31日

4. 受験票送付：

2023年8月中旬に書類審査に合格した受験者に送付する。

5. 受験料：

10,000円（上記の書類審査に合格した者のみ下記銀行口座に払い込む）。払込の締め切りは2023年9月30日。

払込先銀行口座

銀行：北洋銀行

支店名：北七条支店

口座No：3871623

口座名：日本野生動物医学会認定専門医事務局

事務局代表 坪田敏男

6. 認定試験日程：

2023年10月～11月を予定（受験希望者の要望を考慮します）

7. 試験用参考書について

参考書一覧は

<https://sites.google.com/a/jczwm.com/information/>

よりダウンロード可能です→2020年12月30日にアップされた資料をご参照下さい。

8. その他：

試験に関して何らかの変更がある場合は、学会ホームページとメーリングリストで順次公表します。また、試験に関する質問は、氏名・所属を明記の上、下記アドレスまでe-mailにてお問い合わせください。

【質問の送付先】

和田新平 swada@nvl.ac.jp

植田美弥 ueda.m@hama-midorinokyokai.or.jp

（件名に「野生動物認定専門医について」と付記）

各種委員会から

WEP2「ツキノワグマの保護管理に関する実習」について

学術・教育委員会（卒前卒後教育）

山本俊昭, 加藤卓也, 畠本 樹（日本獣医生命科学大学）

Wildlife Educational Program (WEP) の第二弾を日本獣医生命科学大学が担当し、2022年10月8日から10日の二泊三日で実施しましたのでご報告します。WEPの第二弾においては、長野県軽井沢町でNPO法人ピッキオの協力のもと、ツキノワグマを題材とした野外実習を行いました。今回は9大学から11名の学生が参加し、1年生から5年生まで幅広い学年から申し込みがありました。実習内容は、ツキノワグマの捕獲や外部計測の方法、麻酔、テレメトリーの使用法といったツキノワグマの生態調査方法を実際に野外に出て体験してもらいました。また、ツキノワグマの実践的な獣害対策として、軽井沢町ではベアドッグを導入しているため、ベアドッグの紹介とその活躍について学んでもらいました。他にも、ツキノワグマの生息環境を知るためにフィールドトリップや、マダニの存在を身近に感じてもらうためにフィールドでマダニの採取も行い、ツキノワグマ自身だけではなく周囲の環境との関係を考える機会を提供しました。他のプログラムとは異なり、高度な獣医学的知識を要求しないように、かつどのような分野・学年においても満足できるような実践的な野外実習となるように心掛けました。参加した学生にアンケートを実施したところ、実習内容については概ね満足してもらえ、実際にクマが棲む森でフィールドワークを行えたことが高い満足度に繋がったようでした。また、新型コロナウイルス感染症により様々な面において学生生活への制限があったせいか、複数の大学から集まった学生の間で交流が生まれたことも学生たちにとっては貴重な経験になったようです。本実習では今後も野生動物医学、保全医学の発展のために必要なフィールドワークの経験や野生動物と環境との関係を考える機会を提供していければと考えています。

オンラインシンポジウム「国内における豚熱 (CSF) の現状」開催報告

感染症対策委員会 佐藤雪太（日本大学）

ここ数年、国内で高病原性鳥インフルエンザが発生し各地で猛威を振るっていますが、2018年9月には1992年以来となる豚熱 (CSF: 旧称 豚コレラ) が発生しました。その後も各地の養豚や野生イノシシでの感染が続いていることから、当学会として「国内における豚熱 (CSF) の現状」と題し、CSFの発生状況について専門家からお話をいただき、対策や対応について理解を深めるオンラインシンポジウムを開催しましたので報告します。日時やプログラムは以下の通りです。

日時：2022年11月26日（土）13:00～15:30

プログラム：

1. 開会挨拶

日本野生動物医学会会長 大沼 学（国立環境研究所）

2. 基調講演

座長 野田亜矢子

（安佐動物公園，本学会感染症対策委員会副委員長）

①国内におけるCSF発生状況の経緯・概要

蒔田浩平（酪農学園大学・獣医学類・教授）

②イノシシにおける発生状況について

松山亮太（酪農学園大学・獣医学類・助教）

③近隣国で発生しているアフリカ豚熱 (ASF) の状況，対策と発生時の対応

末吉益雄（宮崎大学大学院 医学獣医学総合研究科・教授）

3. 総合討論：CSF発生に伴う対応状況に関する情報交換

座長 佐藤雪太（日本大学，本学会感染症対策委員長）

4. 閉会

当日は60名ほどの参加でCSF発生経緯に始まり、イノシシでの発生状況、さらに近隣国で見られるアフリカ豚熱 (ASF) の状況や対策まで、非常に分かりやすく興味深い話題を提供していただきました。講演後は幅広い視点からの多くの質問があり、大変活発に議論され、CSFの動向や対策へ向けた参加者の関心の高さがうかがえ、有意義なシンポジウムとなりました。

当委員会としては、今後も同様に野生動物に関わる感染症について、情報を提供・共有する機会を企画していきたいと考えています。その際は多くの方のご参加をお待ちしています。



学生部会から

代表挨拶

清水里香（麻布大学獣医学部獣医学科3年）

日本野生動物医学会会員の皆様，お世話になっています。学生部会22期代表を務めています，麻布大学の清水里香です。

昨年の学会大会はコロナ禍が始まって以来，初めての対面開催

となり，学生部会も大いに盛り上がりました。また，コロナ禍以前には一大イベントだった合宿の開催が前向きに検討され，一時はオンライン交流会にとどまっていた活動に変化がみられています。

変化の兆しは学生部会の在り方，形態にも及びます。長年の課題であった支部制度の見直しや学生部会の位置付けを明記してい

日本野生動物医学会第22期学生部会 役員及び支部長名簿（令和5年6月）

[★新しく就任したもの]

学生部会代表	： 清水里香	（麻布大学獣医学部獣医学科3年）
副代表	： 金山琴未	（酪農学園大学獣医学群獣医学類3年）
	： 鈴木美羽	（麻布大学獣医学部動物応用科学科2年）
	： 伊藤萌林	（北海道大学共同獣医学課程6年）
事務局長	： 松井瑞嬉	（酪農学園大学獣医学群獣医学類3年）
	： 松田 鈴	（岡山理科大学獣医学部獣医学科3年）
会計	： 井上 和	（山口大学共同獣医学部獣医学科3年）
北海道大学	： 春田千紘	（獣医学部共同獣医学過程3年）
酪農学園大学	： 志賀泉美	（酪農学園大学獣医学群獣医学類4年）
	： 水野夏帆	（酪農学園大学獣医学群獣医学類4年）
帯広畜産大学	： 丸山青葉	（畜産学部共同獣医学課程5年）
北里大学	： 早川佑奈	（獣医学部動物資源科学科4年）
岩手大学	： 菅原千尋	（農学部動物科学科4年）
日本獣医生命科学大学	： 菅野紗希	（獣医学部獣医保健看護学科4年）
	： 中川 悠	（獣医学部獣医学科4年）
東京農工大学	：★迫野花南	（農学部共同獣医学科2年）
	：★佐藤優衣	（農学部共同獣医学科2年）
麻布大学	： 黒田紗希	（獣医学部獣医学科3年）
	： 清水里香	（獣医学部獣医学科3年）
日本大学	： 西川 樹	（生物資源科学部獣医学科3年）
	：★木々津 錦	（生物資源科学部動物資源科学科3年）
帝京科学大学	： 大戸 海	（生命環境学部アニマルサイエンス学科4年）
岐阜大学	： 川嶋梨湖	（応用生物科学部共同獣医学科5年）
	： 巽 洋希	（応用生物科学部共同獣医学科5年）
大阪公立大学	： 大内 宙	（生命環境学域獣医学類5年）
岡山理科大学	： 横田 遥	（理学部動物学科4年）
鳥取大学	： 岡村駿治	（農学部共同獣医学科5年）
	： 岩元千紘	（農学部共同獣医学科5年）
山口大学	： 井上 和	（共同獣医学部獣医学科3年）
宮崎大学	： 筒井 静	（農学部獣医学科6年）
鹿児島大学	： 大須賀詩織	（共同獣医学部獣医学科5年）

※学生部会の活動についてはFacebook（<https://www.facebook.com/yasedo.gakusei/>）をご覧ください。

ただくための会則案などに関する話し合いが進められています。22期は、これまでにない過渡期に来ていると感じています。このような時期に代表を務めることは、またとない貴重な経験になると考えています。自身の行いに悔いのないように、後輩たちに大きな課題を残さないために、頑張っていきたいという決意表明をもって、代表挨拶といたします。

代表を含め、中心メンバーに低学年が多い学生会の任期がスタートいたしました。経験不足等でご迷惑をおかけすることも多いかと思いますが、全力で頑張りますので今後とも学生会へのご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。

■ 猛禽類医学研究所での実習を終えて

田村響平（帯広畜産大学共同獣医学課程6年）

大学入学前より希少種の保全に関心のあった私は、低学年の頃から野生動物関連の実習や調査に参加してきました。しかし、私の通う帯広畜産大学から車でわずか2時間程度の猛禽類医学研究所（IRBJ）へは一昨年まで訪れたことがありませんでした。他の施設と比較して近場にあるため、高学年になってから参加しようと思っていたためでした。そう考えているうちにコロナ禍と施設の改修が重なってしまいました。最終学年でようやく実習に参加できることになりました。

傷病鳥類救護に関する技術を学ぶほかに、本実習の目的は2つありました。1つは、書籍やネットから北海道における猛禽類を取り巻く環境は依然として厳しいことは知っていたものの、実習を通じてその実状をより深く理解することでした。もう1つは、IRBJの皆さんの活躍を方々で聞く中で、実際に働いている方から直接お話を聞くことでした。このような考えを胸に3日間の実習に参加しました。

実習1日目の午前には鳥類の基本的な知識に関する講義の予定でしたが、前々日に運び込まれたシマフクロウの処置があり、予定を変更して見学することができました。翼の下垂や右目の散瞳が見られ、中枢神経障害が認められる症例でした。生きた状態のシマフクロウがIRBJに運び込まれるのは非常に珍しいとのことを知って、私達実習生はとても貴重な経験をすることができました。その後は、頭の揺れが見られるオジロワシと、交通事故によって左脚の脛骨骨折が見られたタンチョウの処置を見学しました。初日の午前から、北海道を代表する野鳥の処置を間近で見ることができて、大興奮のスタートとなりました。

午後は施設見学に参加しました。リハビリケージは治療を終え

放鳥を待つオジロワシ、オオワシが收容されるもので、動物の飼育施設としては珍しく上から見ると台形でした。これによって、ケージ内でも旋回することができるため、飛翔の練習をすることができるそうです。また、上部はゴルフネットで覆われていて、これは金網では鳥が怪我することがあるからだとなりました。このように、IRBJの施設には長年の経験に基づく工夫が随所に施されていました。

2日目は「傷病鳥類の救護の流れ」、「鳥類の臨床」と「猛禽類の麻酔管理」の講義を受けました。どれも大学では学ぶことができない内容で、現場で働く方から経験を交えて、直接ご指導いただく濃密な時間となりました。その後、歯科医師である遠井先生と共に、猛禽類の欠損した嘴や爪の治療の講義を受けました。実際に上嘴を欠損したオジロワシに使用していた義歯ならぬ「義嘴」を見せていただき、さらには実習生自ら手を動かしレジン素材を使った猛禽類の爪の作製を体験しました。その際に、齋藤先生がおっしゃっていた、他の分野のスペシャリストと協力することで獣医学の幅を広げることができるというお話がとても印象的でした。

最終日は、バンディング調査の体験をしました。かすみ網の設置を手伝い、野鳥の捕獲から、施設に持ち帰って足環を装着するまでの一連の流れを見学しました。バンダーの資格を取るためには鳥に関する膨大な知識を身につけなければならないことを、身をもって知ることができました。その後は、終生飼育個体を用いた採血と包帯の巻き方の実習でした。生きているオジロワシを用いてこのような処置を行う、またとない経験になりました。

充実した3日間の実習は、あっという間でした。齋藤先生から直に猛禽類の診療技術を学び、バンディング調査も体験するこ

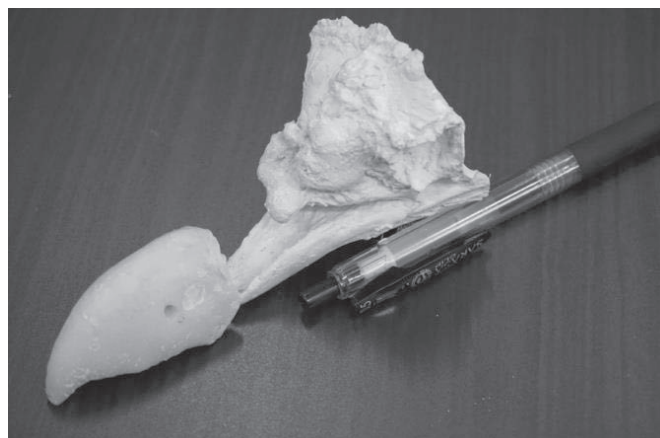


写真1 左下に見えるものが義嘴



写真2 剖検にて口腔内のスワブを回収する様子



写真3 かすみ網を設置する様子

とができて大変貴重な経験となりました。本心を言えば IRBJ の皆さんには迷惑がかかることは重々承知のうえで、「実習期間がもう少し長ければ」と感じるほど素晴らしい実習でした。野生動

物に携わりたいと考える獣医学生が在学中に十分な経験を積めるように、今後とも国内での実習が充実することが大切だと感じました。

■ WEP2 (ツキノワグマの保護管理に関する実習) 活動報告

川嶋梨湖 (岐阜大学応用生物科学部共同獣医学科 5年)

2022年10月8日から10日まで、軽井沢にてWEP2(ツキノワグマの保護管理に関する実習)に参加しました。クマの痕跡観察やベアドッグによるクマ探索の見学、ダニ採取と同定など、大学の授業ではできない様々な経験をした、充実した4日間でした。他の大学から参加した野生動物に興味のある学生の皆さんと様々なお話をして仲良くなれたのも嬉しかったです。参加費が3万円、交通費往復3万円と申し込むのに勇気のある実習でしたが、参加して大正解でした。以下に実習中の思い出や印象深かった出来事を書いていきます。

1日目は午後に集合した後、矢ヶ崎山に登りクマの痕跡を観察

しました。クマが木に登った際の爪の痕、食べた枝をお尻に敷いた痕であるクマ棚、木の皮を剥いで食べた痕跡であるクマハギなどを見ました。クマの痕跡を見るのは初めてで、とても興味深かったです。クマの爪の痕と私の手を合わせてみたら、クマの掌と私の掌は大体同じ大きさであることが分かりました。痕跡は少し山に入るだけでいくつも見つけることができ、軽井沢町の近くにクマが住んでいるということを実感しました。夜には、軽井沢でクマの保護管理をされているピッキオの方にクマの生態や保護管理の手法について講義をしていただきました。軽井沢ではクマの殺処分数が少ない、というお話が印象的でした。軽井沢町ではクマを個体識別し、それぞれのクマについて人里での行動から危険度を設定しています。危険度の高い個体は追い払いなどで人間を怖いと学習させて、ツキノワグマをできるだけ殺処分せずに管理していく仕組みを実践しているのだそうです。



写真4 罠によるクマの捕獲についての説明



写真5 クマが開けられないように対策されたゴミ箱



写真6 ベアドッグのタマを用いたクマの管理

2日目は、ピッキオの方にクマ用の罠を用いたツキノワグマの捕獲方法や麻酔、クマのゴミ漁りを防止するクマ対策ゴミ箱について教えていただきました。ツキノワグマ用のドラム缶罠を見るのは初めてでした。罠にかかったクマに、安全に麻酔をかけられるよう、蓋が板と網の二重構造になっていました。カレリアンベアドッグを用いたクマの管理方法に関しても、ベアドッグの「タマ」と一緒に教えていただきました。タマは非常によく訓練されていて、ハンドラーさんの指令に忠実に従い、山の中に隠されたクマの手の匂いを頼りに探し出すことができ、それだけでなく私をはじめとする犬の大好きな学生たちに取り囲まれても、吠えたりせず尻尾を振っている懐っこい面もありました。ハンドラーさんのおっしゃる、獣害対策だけでなく活動について地域の方に知ってもらうための架け橋にぴったりだと思いました。白旗を地面に引きずり、集めたダニの顕微鏡を用いた同定も行いました。白旗についていた幼ダニが思っていたよりもとても小さく、砂粒や

ゴミとよく似ていて、見つけられる様になるまでに時間がかかりました。幼ダニは特徴が少なく、異なる種同士の幼ダニもよく似ているので同定は非常に難しかったです。

3日目は発信機をつけたツキノワグマの直接観察に挑戦しました。発信機の電波を頼りに近づきましたが、残念ながらクマに逃げられてしまい、直接見ることは叶いませんでした。追いかけた個体が冬眠の際に使用した冬眠穴も見学しました。炭焼き窯を冬眠穴として利用していたもので、冬眠穴からは車の走る音が聞こえてきました。ここでも軽井沢の人間とクマの距離の近さを感じました。

現地でお世話になった、日本獣医生命科学大学の山本先生、加藤先生、寫本先生、NPO 法人ピッキオの玉谷さん、田中さん、学生の皆様にこの場をお借りしてお礼申し上げます。これからもWEPなどのプログラムへ参加し、色々なことを経験してみたいと感じる、充実の4日間でした。

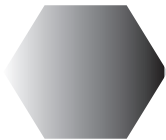
第29回日本野生動物医学会大会（鹿児島大会）のご案内

* 2023年3月時点の予定

日程：令和5年9月22日（金）～24日（日）

- ・22日午後：各種委員会・理事会・評議委員会
- ・23日終日～24日午前：発表・自由集会等
- ・24日午後：市民公開講義

会場：鹿児島大学 郡元キャンパス内



令和4年度若手研究者国際学会渡航費支援による研究発表報告

鳥居佳子（札幌市円山動物園・北海道大学大学院獣医学研究院）

令和4年度若手研究者国際学会渡航費支援に採用となり、タイのチェンマイで行われた第15回 Asian Society of Conservation Medicine（アジア保全医学会）で口頭発表を行いましたので、その報告をいたします。

アジア保全医学会はアジア圏内の野生動物に携わる人々が集結する唯一の学会です。私はこれまで本学会に2回参加しました。第11回バリ大会では初めての国際学会参加・口頭発表を、昨年（2021年）の札幌大会では初めての口頭発表の座長を経験し、研究者としての経験値を増やすことができました。アジアの最新情報を収集できること、個人的にも思い入れ深いことから、この学会には継続的に参加したいと考えていました。第15回アジア保全医学会は、チェンマイ大学（タイ）にて対面とオンラインのハイブリット開催でした。幸いにも口頭発表の機会をいただき、渡航費助成を受け現地へ参加できたことに感謝申し上げます。

15回大会は10月26日から28日までの3日間開催されました。Plenary Sessionでは「野生生物保全における動物福祉と倫理」、「野生生物における繁殖管理学」と「人と野生生物の境界面」について、Keynote Sessionでは、「野生生物保全における全球的影響」と「野生生物の健康」についての講演がありました。大会を通してワンヘルスを意識した野生生物の身体的・精神的健康について考える構成になっていると感じました。大会中全部で14の

セッションにわかれて口頭発表が行われました。

聴講できた口頭発表の中で特に印象に残ったのは、ワンヘルス実践者のメンタルヘルスに関するアンケート調査でした。保全活動を「良好なメンタル」で実践していくには、財政・一貫したポリシー・活動遂行するためのサポート体制が必要であり、それらの不足を感じているという結果が得られていました。保全活動は、多くがボランティア活動に近く、実施者の「やる気」が非常に重要です。しかし、継続的な保全活動を実施していくためのメンタルヘルスについては注目されていませんでした。この発表を聞き、アジア共通の課題であることを確認しました。また、実際の保全活動事例も報告されていました。シンガポールのセンザンコウ保全の取組事例では、保護から野生復帰まで3機関が連携している一方、マレーシアのマレートラの事例では、連携体制が機能できていない厳しい現状が報告されました。対照的な両者の発表から種（あるいは国）によって保全状況が異なることを改めて認識しました。後者のような支援を必要とする事例に対しては、国際的な協力体制を構築するなど学会の位置づけを考えさせられる発表でした。保全活動の支援とサポート体制の構築と強化は、域外保全の拠点である動物園が貢献できることであり、機能している事例は国内でもあります。休憩時間に話をしたインドネシアの参加者からは、日本での保全活動、動物種などについて質問されたた



写真1 メイン会場の様子



写真2 懇親会の様子 タイ伝統舞踊

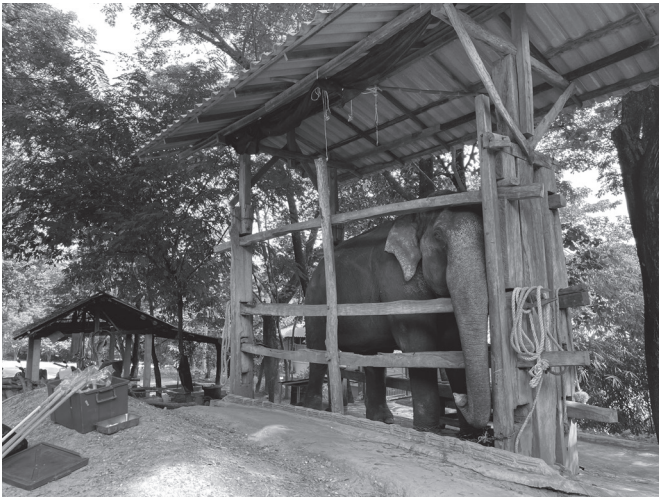


写真3 ランパンゾウ保護センターの視察
精液採取を行う準備中



写真4 Ampika 博士との写真

め、日本からの情報発信がもっと積極的に行われると双方に発展の可能性があると感じました。福祉のセッションでは、エンリッチメントと動物の行動についてアプリケーションを使った解析について口頭発表がありました。この研究では Zoomonitor というアプリケーションを使い、現場でパッドを使いながら行動を記録していました。この Zoomonitor は、リンカーン動物園が開発したアプリで、任意の協会（日本動物園水族館協会など）に加盟している園館は 3GB まで無料で使用できる仕様となっていました。実際に使用したいと思います。このように、野生生物の保全から動物園での活動までさまざまなトピックスに触れることができるのがこの学会のよいところであり、有意義な学会参加になりました。

私は、繁殖セッションで「Trial for improvement of semen quality by GnRH administration in a captive male African elephant（飼育アフリカゾウにおける GnRH 投与による精液性状の改善のための試験）」について口頭発表いたしました。私の博士研究はヒグマの繁殖生理学でしたが、今回アフリカゾウの研究を報告したのは、研究計画段階でアドバイスをいただいた Brown 博士が本大会に出席されることが大きな理由でした。

Brown 博士は、スミソニアン保全生物学研究所内分泌研究室の室長であり、30 年以上ゾウの内分泌生理学、ゾウ不妊メカニズム解明の研究を行っているゾウ研究分野の権威です。また多種多様な動物種の内分泌学を解析し、生殖周期を解明してきました。私は大学院時代にインターンシップ先として検討していたときにつないでいただき、発表したアフリカゾウのホルモン治療に

ついてアドバイスをいただきました。結果としてインターンシップは別機関に受け入れていただきました。しかし、やり取りの中で薬剤投与の方法や考え方について議論してきましたので、ぜひ対面でお会いしたいと考えていました。学会中つねに人に囲まれ、長時間のお話はできなかったのですが、今後もゾウのホルモン治療などについて連絡を取り続けたいと思います。口頭発表では、ディスカッションの時間がなかったのですが、発表後に会場内で研究計画の参考にした Somgird 博士にコメントをいただくことができました。また、座長である Ampika 博士は、タイの Zoological Park Organization の Wildlife Reproductive Innovation Center で人工繁殖技術に携わっていますが、ゾウの人工授精の状況や難しさについて共有することができました。タイの動物園における野生動物保全体制や連携について学び、その関係者となることができました。特に、ゾウの臨床繁殖について技術知識のあるタイの関係者と人脈を形成できたのは、今後の研究活動遂行の上で財産となりました。さらに、本事業の助成とは別に、ランパンゾウ保護センターの獣医師の案内で、施設やアジアゾウの精液採取の様子を見学させていただきました。これらの経験は現地で参加しなければ得られないことでした。

最後に、学会の参加にあたって、本事業により渡航費の助成を頂いたことに深く感謝致します。来年も学会に参加できるよう研究活動に邁進していきます。来年は、済州島（韓国）での開催です。この報告を読んで、日本の動物園水族館あるいは野生動物保全に係る関係者がアジア保全医学会済州島大会へ参加してみたいと思っていただければ幸いです。

告知—酪農学園大学野生動物医学センター WAMC の閉鎖について

浅川満彦（酪農学園大学）

今から 20 年前に刊行された本ニュースレターで酪農学園大学（以下、本学）の野生動物医学センター（英名 Wild Animal Medical Center, 以下、WAMC）設立について告知した（浅川 2003）。しかし、この施設は 2023 年 4 月をもって閉鎖された。この決定は 2022 年夏になされ、同年 9 月、つくば市で開催された本学会大会の総会席上、浅川が口頭で説明、予告した通りであった。

1988 年 12 月、本学附属家畜病院（当時）は、北海道庁と（社）北海道獣医師会からの要請を受け、「野生傷病鳥獣受診動物病院」（以下、野生動物病院）を設置し、外科学教員とその所属学生が献身的に対応された。当時、交通事故、油汚染、鉛中毒などにより弱った野鳥が中心に搬入され、これは 2004 年 4 月、同大・附属家畜病院が動物病院（現・動物医療センター）として新設されるまで継続した。そして、その野生動物病院の機能は、2004 年度、この動物病院構内に付置された WAMC に機能移転されることになった。新動物病院は 2003 年度から開始された文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の競争予算を得て新設され、その事業計画では新動物病院の敷地内に「野生動物管理棟」（同省届出名称）という建屋が設置された。浅川はその運営・運用を任されたことは、先のニュースレターでもご紹介した（浅川 2003）。

野生動物医学センターという名称は運用名称で、当然、本学会からお借りし、酪農学園理事会で決定されたのである。WAMC の設立当時、いわゆる野生動物病院ではなかったが、新動物病院の当時の院長からその機能を担うよう依頼された。新動物病院本館では、バイオリスクの関係上、野生種搬入は禁じられたという

のが理由であった。幸い、WAMC に集結する学生・院生に助けられ、野生動物病院の機能は維持することができた。また、こういった入院個体は、本学会から本学に依頼された SSC（夏期学生コース）はじめ多くの啓発活動でも利用させていただいた。

一方、欧州獣医学教育機関協会（EAEVE）の国際認証を目指し、獣医学教育の質の保証と国際化に取り組んでいる過程で、獣医学群全体のバイオセキュリティの見直しを行い、こういった野生個体は鳥インフルエンザをはじめとする人獣共通感染症の蔓延防止の観点から困難とされた。そのため、2022 年 5 月 18 日、まず、WAMC は前述した野生動物病院機能は終焉し、その後、有害捕獲された生態や死体までも搬入禁止となり、最終的に WAMC 自体が閉鎖に至った。

これまでの約 20 年にわたり、WAMC の諸活動にご支援頂いた本学会諸兄には、心から感謝をしたい。なお、WAMC の入っていた建屋自体は、更地にはならず、被災・虐待されたイヌ・ネコのシェルター（避難所）に転用される。したがって、今後、ある世代にとっては往時の WAMC を偲ぶ縁にはなろう。また、浅川は 2025 年 3 月末をもって定年退職予定なので、その日までは WAMC で収集された大量の試料登録や刊行業績の整理など残務処理に専念し、WAMC の後継施設再興の契機に繋がりたいと願っている。どうか、今後とも見守ってほしい。

引用文献

浅川満彦. 2003. 酪農学園大学野生動物医学センター設立について. *Zoo and Wildlife News* (日本野生動物医学会) (17): 21-22.

動物園・水族館から

動物園・水族館リレー連載

今回は、愛知県岡崎市で動物園獣医師として奮闘している小野寺先生をご紹介します。彼女とは大学時代、同じ研究室でよく一緒に行動していました。何に対しても真剣に取り組む、素敵な人柄の持ち主です。彼女のココロにささった言葉…私も興味があるので、この機会に思いきって聞いてみました。

[編集委員・橋本]

「私のココロにささった言葉」

小野寺幸江（岡崎市東公園動物園）

私は現在の動物園に勤めて3年目、動物園での勤務は合わせて6年目になります。いくつかの職場を経験し、大学卒業後11年が経とうとしています。今までの人生でココロにささって残っている言葉は、職場の先輩が口にしていた『トライアンドエラー』です。ずばり、私は性格が臆病です。プライベートでもその傾向はありますが、仕事では特にそれが顕著です。初めて自分が出会う症例に処置を行う際に、方法を調べたり経験者に聞いたりしても、「うまくできるかな…」と自分を信じきれないときがあり、実行を引き延ばしかねない勢いです。そんな私がある不安を職場で口に出した時に、先輩から言われたのがこの言葉でした。「あなたならやれるよ!」という言葉の後に言われたので、とても背中を押された言葉でした。ちなみに牛の子宮内へのイソジン注入だったのですが、その時は失敗してしまいました…(後日同僚が行ってくれました。現在の職場は、動物園動物診療の他、家畜の往診業務もあります。)幸い、牛の繁殖手技については、勉強会や研修も受けさせてもらえるので、今後も頭を働かせながら、トライの数を増やし、エラーやサクセスを重ねていきたいと思っています!先輩から背中を押してもらえたように、私も誰か不安に感じている人がいたら、「やってみようよ!」と前向きに背中を押したいです。

その他のココロにささった言葉としては、『影響の輪に集中すると主体的に生きられる』です。これは知人から勧められて読んだ「7つの習慣」という本の中で書かれていたものです。大学を卒業し、働くようになってから、どうしても人の目が気になってしまっ、行動しづらい、生きにくいと感じていた私は、試しにコーチングというものを受けてみました。そのコーチングを受ける前、課題図書として示されたのがこの本でした。読まれた方も

きつーいると思います。簡単に言うと、私たちの普通の生活の中での関心事は、「関心の輪」と「影響の輪」の二つの輪に分けることができます。「関心の輪」は自分が関心を持っているが自分にはコントロールできない事柄、「影響の輪」は自分が影響を与えられる事柄です。これを読んで、私が今まで悩んできたことを振り返りました。例えば、今日も職場の先輩の機嫌が悪かったらどうしよう…や、考えられる限りの治療はしたけれど、動物の具合がよくならなかつたらどうしよう…、急患が入ったらどうしよう…等々。業務時間外にも独り相撲をとって、私大変だったな!そして悩むのが好きだったのだなと思いました。今も似たようなことで悩みますが、自分ができる範囲のことをやる、まさに影響の輪に集中することで、自分満足度があがって、仕事が前よりもしやすくなりました。業務上のやるべきこと、やりたいこと、できればやりたくないこと…などに分けるとしても、主体性を持



写真1 産まれたたの子ヤギ抱っこ!働く人の特権ですね!



写真2 美味しいものあげるのので、仲良くしてね（普段ワクチンとか痛いことかしらないから）

って取り組むことができれば、なんでも自分で責任をもって前向きにやれることに気が付きました。コーチングを受けたことで、今まで漠然ともやもやしていたものが、整理できたり気があったりして、とてもよかったと感じています。

最後の言葉は、最初の職場の上司から言われた『やって無駄なことは何もない』です。新卒で自治体に就職し、食肉検査に従事しました。異動先の一つに動物園があり、異動を希望していると、勤務1年目から上司に伝えていました。その上司との面談の際に言われたのですが、何年経ってもその通りだなあと感じます。その後、民間の動物園や家畜保健衛生所、動物病院での勤務を経て現在に至りますが、どこで勤めるにも、前職までの経験が活かないことはなく助かっています（解剖や臨床的なこと、家畜衛生等）。

元々の性格も広く好奇心を持つほうなので、獣医師免許を使って働くことが可能な広い範囲を経験できている今に感謝と満足しています。今はまだできない技術や増やしたい知識等は、これからも周りの方に教えてもらったり、失敗から経験を積んでいくこ

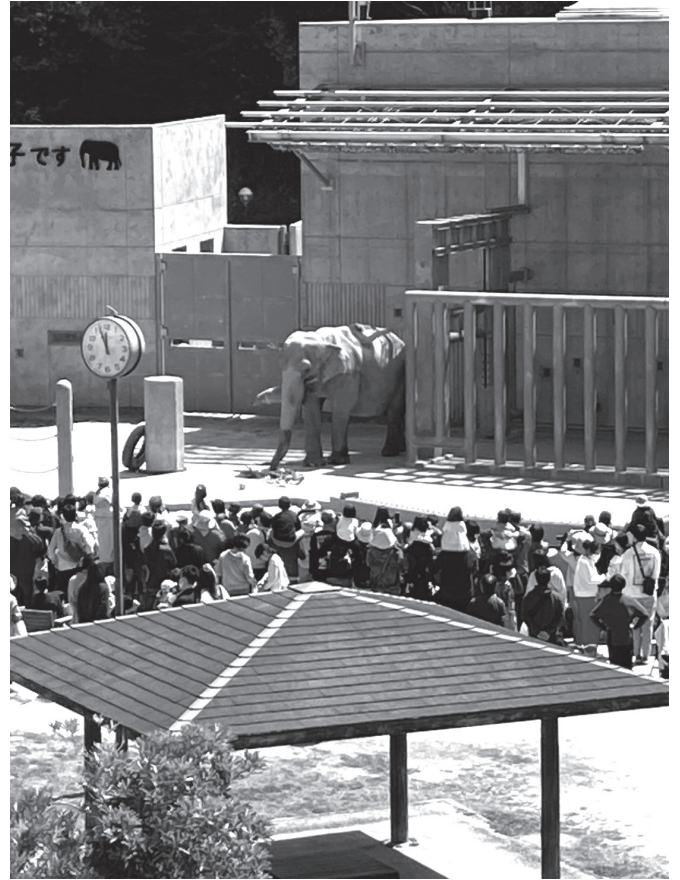


写真3 ふじ子 55 回目のお誕生日会

とになりますが、伸びしろはあると思って（笑）、今後の何十年かの獣医師人生を楽しんでいきたいと思っています。

完全なる自分語りとなるこの文章を読んでもらうのはかなり恥ずかしいと思いましたが、学生時代の大切な友達から依頼されてうれしかったので、文章で残させてもらおうと思いました。緊張した、かちかちで拙い文章を最後まで読んでいただきありがとうございました。



うちの自慢の工具箱！

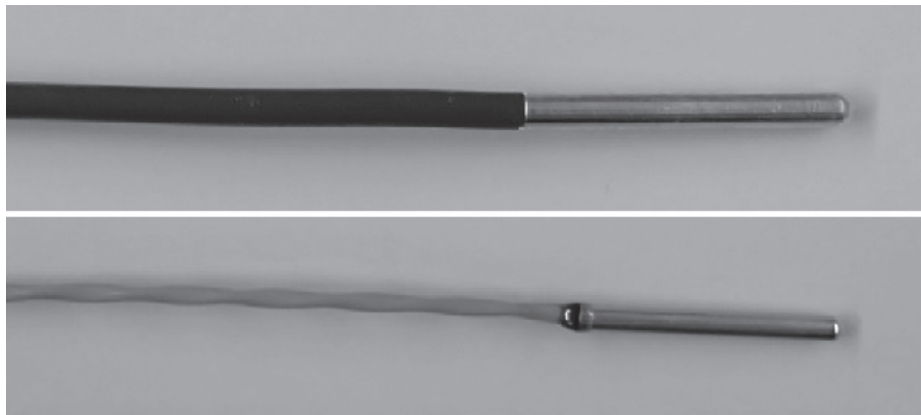


小谷由佳子（名古屋港水族館）

鯨類の体温測定は、腹側にある肛門にひも状のセンサーを挿入して直腸温を測定します。健康管理において基本的な検査で、日本全国の水族館で実施されています。

実は2020年、国内水族館シェア、当時ほぼ100%ともいわれる体温計が製造中止となり、多くの水族館が代替品を探さなければならぬ状況になりました。いくつか代わりとなる体温計は見つかったのですが、私たちの求める条件に合致するものはありませんでした。そこで名古屋港水族館では、企業の協力を得ながら理想の体温計を作成することにしました。

特に重要な点は、肛門に挿入するプローブの形状と測定時間です。挿入しやすい太さ・かたさ・長さ・防水性を備え、短時間で測定可能なプローブを目指して試作を重ね、やっと現在のものにたどり着きました。挿入しやすく20秒程度で測定可能なプローブが完成し、今では毎日使用しています。ですがさらによりよいプローブにするため、試作は現在も継続中です。



試行錯誤を重ねたプローブ。上の写真：1号機。下の写：2号機，現在使用中のもの。

日動水誌より

橋本千尋（周南市徳山動物園）

第64巻第3号2022年12月に掲載された獣医学関連記事の紹介

症例報告

「野生個体からの細菌感染が原因と考えられるミズクラゲの傘の穴空き症状について」

坂岡 賢，大野 佳，星野昂大，尾田愛実，杉藤 遥，水野郁路，赤尾奈美，廣田神奈，中嶋清徳，栗田正徳

野外で採集したミズクラゲを水槽に収容後、傘に穴が空く症状が発生し、飼育中の他の個体にも広がった。症状の進行は極めて早く、外傘に小穴が形成された後2日以内に傘が崩壊した。患部の細菌検査の結果、*Pseudomonas* 属の細菌が検出された。ニフルスチレン酸ナトリウム（NFS-Na）浴により症状が収まる傾向が認められた。しかし、粘液過多、摂餌低下、拍動停止が認められた。よって、*P. sp* が原因菌と考えられる穴空き症についてはNFS-Naを用いた治療は効果的でないとして示唆された。



リレー連載



前号では、NPO 法人どうぶつたちの病院の越田先生に対馬で奮闘される日々をご紹介いただきました。今号では、学生会代表を経験された後藤拓弥さんに、学生時代の東北でのフィールド活動から現在に至るまでのエピソードをご紹介します。

人と野生動物のより良い社会を目指して

後藤拓弥（株式会社 野生動物保護管理事務所）

■ はじめに

リレー連載のバトンを受け取りました、野生動物保護管理事務所の後藤拓弥です。早いもので気付けば社会人8年目となりました。今回は、私がどのようにして野生動物のフィールドの世界に飛び込んだのか、振り返ってみたいと思います。何か1つでもお役に立てましたら幸いです。

■ 浪人時代：趣味は野鳥観察

まずは私の原点をご紹介します。きっかけは大学入学前に遡ります。当時の私は進路に思い悩み、高校卒業後、長い浪人時代を

過ごしていました。誰かの役に立ちたい、そんな漠然とした思いは抱きつつも、自分は何ができるのか？ 何になりたいのか？ 答えの出ない日々。この時ほど、家族や自分自身と向き合った時間はこれまでも、きっとこれからもないことでしょう。そんな時分、兼ねてから両親の夢であった愛犬を飼い始めたことが私の人生の大きな転換点となります。

当時の千葉県の実家周辺は田園風景が広がる環境で、愛犬を飼い始めたことで一緒に河川沿いを毎日散歩するようになりました。愛犬との生活も慣れてきたある日、私にとって運命的な出会いが。河川沿いを散歩途中に、エメラルドグリーンの1羽の野鳥がピピピ…、と美しい鳴き声で飛んでいくのを目にしたのです。「君の名は!？」それが私の野鳥観察の最初のきっかけです。翌日、再会を願って自分の肉眼と耳を頼りに、あのエメラルドグリーンの野鳥を毎日探し続けました。搜索してから数週間後、当時所有していたデジカメで撮影に成功し、購入したばかりの小さなポケット図鑑と見比べて、「カワセミ」（写真1）だと分かった時の感動は今でもよく覚えています。

カワセミから始まり、自然と他の野鳥にも興味が沸き、眼に入るようになりました。田んぼで、だるまさんが転んだ、をしてい



写真1 カワセミ

るあの鳥はツグミ、地鳴きと共にヤブにすぐ隠れてしまうあのシャイなあの鳥はアオジ、河川の岩場で尾羽をフリフリしているあの鳥はハクセキレイ、ケンケンと元気に鳴くあの鳥はキジと、このような具合に、まるで友人が増えるような感覚で識別できる野鳥種が増えていきました。野鳥の種名を認識することで、日常に彩りが加えられ、同じ散歩道であっても1日として同じ日はなく、全く違った風景に感じることができます。趣味が野鳥観察となり、歩いた分だけ、自分の中に蓄積された大切な思い出です。こうした経験を経て、自分が好きな野鳥種、さらには野生動物のスペシャリストになりたい！それなら獣医学科に行けば、野生動物に詳しくなれるのではないかと、そう考えたことが獣医を志したきっかけです。他人よりも遠回りをしましたが、決して無駄な時間ではなく、強い信念として、自分の中に刻まれた大切な時間だったと思っています。

■ 大学時代：五感と知識を磨く

4年間の浪人時代を経て、青森県十和田市にキャンパスを有する北里大学に合格・進学することができました。大自然に囲まれた環境で勉学に励みたいと考えていた私は、思惑通りに東北の大自然に魅せられ、とにかくフィールドに通う日々を過ごしました。毎週末は家に自宅にいることはほとんどなく、山、川、海、湖と様々な環境で調査や散歩を続けたことで、識別できる生物種は爆発的に増えました。下北半島で夏はアブに襲われ、冬は極寒の雪の中で北限のニホンザルを、竜飛岬で春と秋に何千羽と渡りをする野鳥たちを、夜の蔦沼で巨大なモリアオガエルの卵塊を観察したこと…。自分の五感を磨き続けた6年間、語り尽くせないほどの思い出が残っていますが、ここでは最も印象に残っている、ある野鳥種に関してご紹介したいと思います。

当時の私は哺乳類、野鳥、両生・爬虫類、魚類、植物等を対象とした様々なフィールドワークを主とした、自然界部という部活動に所属していました。自然界部には、特定の生物にとにかく詳しい学生が多く在籍しており、各役員は哺乳類班、野鳥班、両生爬虫類班、アクア班、植物班など、それぞれの班に所属します。野鳥班に所属した私も早朝探鳥会など毎週様々なフィールドワークに参加することになりました。時折、先輩方が企画されるご飯会では、お互いに得意な分野を話始めると朝まで語り合うことも。ある日、大学を訪問されていた自然界部OBの先輩から「某市内のどこかにある猛禽がいるようだ」との情報提供がありました。先輩より先にその猛禽を見つけたい、翌日から私の調査が始まりました。お金もなく、車は持ち合わせていませんでしたが、自分

の足と自転車（ママチャリ）があるじゃないか！と若さゆえのエネルギー（？）で、道路地図で目星を付けて市内のあらゆる林を探し回りました。

調査を開始して数週間経過した頃、いつものように自転車で走っていると、「キキキキキキキキキキ…」と、これまで聞いたことの高い鳴き声を耳にしました。自転車を止め、声の主はどこだと目と耳に意識を集中していると、スギの木にキジバトほどの大きさの野鳥がこちらを観察しているのが眼に入りました。キジバトだな、と思いつつも双眼鏡を合わせると、そこにはこれまで見たことがない、全く違った模様の野鳥が！カッコよさと可愛さを兼ね備えたスマートな顔、縦じまのシャツ、オレンジのズボン、そこには探し続けていた「チゴハヤブサ」（写真2）がいました。遠くからしばらく観察していると、どうやら2羽いることが分かり、後日この場所で巣も発見し、3羽のヒナの繁殖も確認できました。その後も、某市内で複数の営巣木の確認、ヒナや巣立ちなど観察を続けた経験からチゴハヤブサが私の最も好きな野鳥種となりました。

一方、野生動物に関する知識や交流を拡げたいと考えていた私は、日本野生動物医学会学生部会の北里大学支部にも所属し、支部長を担当していました。当時は関東地方の大学支部の活動が活発で、例えば関東交流会といった野生動物の勉強会（関東地方の複数大学が集い、それぞれのテーマを持ち寄ってスライド発表）が開催されていました。北里大学支部では、支部内での任意の勉強会があったものの、支部としての他大学と合同での企画はありませんでした。前述の自然界部で様々なフィールドワークを続ける中で、東北地方の大学にも活発な自然系の部活やサークル活動があることを知り、「関東だけでなく、東北での交流会を実現しよう！」と考え、東北の複数大学の学生に打診活動を進めたところ、どの大学の学生も趣旨に賛同してくれ、岩手大学、東北大学、弘前大学の有志と合同で各大学でのスライド発表、フィールドワークを組み合わせた総勢80名ほどの東北交流会を開催することができました。この企画を通して、かけがえのない多くの出会いや知識を得ることができました。

さらに知識を拡げたいと考えていた私は、その後は北里大学支部を飛び出し、学生会本部の運営にも携わることとなりました。学生会の活動の中でも最も印象に残っているのは、学部2年で初めて学会大会に参加した時のことです。この時のある先輩との出会いが、私の進路を大きな影響を与えることとなります。野生動物のスペシャリストである先輩は、業務やプライベートで様々なフィールドワークを実施されていました。お話を伺うだけ



写真2 チゴハヤブサ

でも勉強になることばかりだったのですが、野生動物の勉強をしたい！とお伝えしたところ、各地の様々な調査に参加させていただき、プロの調査を直々に学ぶことができました。野生動物に関わる上で「座学や書物で得る知識」と「現場で習得する五感」、この両輪があって初めて一人前。調査に参加させていただく中で先輩から教わり、社会人になった今でも、私にとって大切にしている考え方は、野生動物のスペシャリストになるためには、きっと両輪のどちらが欠けてもバランスが悪くなってしまいます。私の大学時代はフィールドワークと学生会での活動、まさにこの両輪を磨いたとても充実した時間でした。

ここまで私の大学時代の活動の一部をご紹介しました。大学時代を濃い時間にできるかどうかは自分次第だと思います。どれだけ考え、どれだけ悩み、どれだけ行動したかで、きっと大きく変わってきます。若い学生の皆さん、思いがあれば、知識は後から付いてきます。また、多感なこの時期にフィールドで五感を磨くことは、とても大切なことだと私は思います。ぜひ積極的にフィールドに出てよい学生生活にしてください！

■ 社会人：野生動物の仕事

大学卒業後、野生動物を仕事にするか、ライフワークにするか。

前述の先輩との出会いやフィールドワークの経験から、人と野生動物の軋轢を解消したいと考えるようになり、最終的な進路は野生動物を仕事にする関わり方を選択しました。運よく現職の野生動物保護管理事務所の本社調査事業部に配属となり、現在は東日本を中心に、主に中大型哺乳類のサル、シカ、クマ、イノシシ、キョンを対象とした業務に取り組む日々です。年間を通して様々な現場がありますが、ここでは最近私が関わっているニホンザル業務の一部をご紹介します。

ニホンザルは群れで生活をする野生動物です。メスは基本的には群れを出ることはないと言われ、産まれた群れで一生を過ごします。一方でオスはある年齢になると群れを離れ、周辺の群れに入ることによって種の多様性が維持されています。ところで皆さんは「野生動物の餌付け」と聞いて、どんな様子を想像されますか？おそらく観光地に出没した野生動物に対して、観光客が手渡しでエサをあげる姿を想像される方も多いのではないのでしょうか。餌付けをされた野生動物は徐々に人間を恐れなくなり、時に人間に対して攻撃的な行動を示す個体も出てくるために問題となっています。このような餌付けは「意図的な」餌付けです。しかし、一方

で「非意図的な」餌付けが同様に問題となっていることをご存じでしょうか？私に関わる現場でもまさにこの「非意図的な」餌付けが、人の生活圏に野生動物を誘引する要因の1つとなっています。では、「非意図的な」餌付けとは何でしょうか？例えば、人里周辺で管理を放棄されたカキ、クリ、ユズといった果実がこれに当たります。これらの果実は栄養価も高く、ある程度数もあるので、野生動物にとってはご馳走です。人が気付かないうちにこれらに依存する野生動物が発生してしまうわけで、これが「非意図的な」餌付けです。実際に私のニホンザルの現場でも、冬季は農地周辺のユズの実の依存が起きています（写真3）。元々は林内で生活しているニホンザルが、徐々に人の生活圏に近づくことで、ユズの実より民家に近い畑の農作物にも手を出す個体が発生します。初めは特定の個体であった被害は次第に群れ単位で農地に出没して深刻になり、さらには人に威嚇したり、民家の屋根に登るような大胆な個体も発生しています。このように放棄された果実は、人間の生活圏にニホンザルを近づける一因となってしまっているわけです。こうした誘引要因を取り除くことは、人の生活圏に近づけない、被害を減らすために有効な対策となります。



写真3 放棄されたユズの実を食べるニホンザル



写真4 山中で遭遇したニホンカモシカ

野生動物の対策は「個体群管理(捕獲)」「被害管理」「生息地管理」の3本柱が重要とされています。被害が発生すると、「個体群管理(捕獲)」が挙げられることが多いのですが、捕獲だけでは決して問題は解決せず、上述した誘引要因を取り除く、といった「被害管理」、「生息地管理」の考え方は、野生動物の対策を進めていく上で大切な視点だと実感しています。人と野生動物がうまく共存していけるように、被害の原因がどこにあるのか、広い視野で現場を観察し、複数の対策をその地域に合った体制・方法で実行していけるように、日々の業務に取り組んでいきたいと思っています。

■ 五感を磨き続ける

社会人となった今でも、五感を磨くためにプライベートな時間でフィールドワークを続けています。外出自粛が続く昨今は、自宅周辺の散歩コースが私のフィールドです。山で会うことのできる野生動物もいますが(写真4)、山に行かずに、都会であっても探せば意外な場所に野生動物(写真5)を発見できるものです。とにかく自分の五感を使って「観察すること」。現場の感覚はフィールドワークがあってこそ鍛えられます。野生動物のスペシャリストになれるように、これからも五感を磨くためのフィールド



写真5 自宅周辺で遭遇したアオバズク

に通い続けたいと思います。

■ 最後に

新型コロナウイルスの拡大により、社会は大きな変革期を迎えました。これまで「当たり前」と言われていた日常がどれだけ尊いものだったか、家族や友人と直接会えること、同じ時間を共有

できることのありがたさを感じる日々です。身近にあって当たり前のこと気付くことのできる感性を磨き、感謝の気持ちを忘れず、人と野生動物のよりよい社会の実現のために、謙虚に、しかし食欲に日々を過ごしていきたいと思っています。皆様と再会できた日には、夜が明けるほど、積もる話を語り尽くしましょう。

現場レポート

突撃！お仕事現場拝見！

実際の仕事現場にリアルに迫るコーナー、仕事内容だけでなく気になる1日のスケジュールまで細かく紹介し、その思いまで伺います。第3回目はニュースレター編集員の一人、誰もが知っている「あの方」の右腕として支えている渡辺さんです。

※今後拝見したいお仕事現場があれば自薦他薦問わず広く募集中です！

所属 猛禽類医学研究所

お名前 渡邊有希子

1. お仕事の内容について教えてください

仕事の流れ／勤務時間／必要とされるスキルやあるとよいスキルなど／この現場で特にみてほしいポイントやぜひご紹介したいものなど

私が勤務する「猛禽類医学研究所」…やたら画数が多く、領収書の宛名を書いてもらう際にとても苦労する…ことはさておき、知る人ぞ知る？ 齊藤慶輔獣医師が立ち上げた野鳥専門の動物病院です。環境省の請負業務として、釧路湿原野生生物保護センターを拠点に希少鳥類の傷病対応や死亡個体含めた原因究明、保全のための活動に従事しています。環境省以外の官公庁、教育機関との仕事も行うので、一般鳥類の救護・調査や出張授業などの教育にも力を入れています。

勤務時間は9:00～17:20となってはいますが、傷病鳥の収容や野外調査の関係で前後することが多いです。現在は小学生の子育て中ですので、土日祝日や時間などは融通を利かせてもらっています。

対応する鳥類は、前述の通り猛禽類だけではなく、タンチョウや海鳥、小鳥類と幅広いです。種が違えば、治療だけでなく、餌もリハビリテーション方法も変わるので、鳥類全般の知識は必要となるでしょうか…臨床面では表情や動きから、相手の思考を読み取るスキル、野外調査では飛翔のシルエットや飛び方から種を識別するスキルも求められます。でも一番必要なのは、気力・体力かも。

猛禽類医学研究所は、救護だけではなく、もう一歩先！ 保全のための予防・対策に踏み込んで活動していることをたくさんの方に知っていただきたいです。交通事故、感電事故、風車との衝突事故、鉛中毒、油汚染、餌付け問題、鳥インフルエンザなどの感染症など…収容原因を突き詰めていくと、ほとんどが人為的要因に関連して負傷/死亡している現実と直面します。人が起こし

ていることに対して、解決するのもやはり人しかありません。理解者、協力者を増やしていきたいと思っています。

2. 現在までの経緯について

きっかけ／それに対して努力したこと大変だったこと／学生時代にしていたことなど

帯広畜産大学に在学していた時は、ゼニガタアザラシ研究グループに所存していました。通称「ゼニ研」、これも知る人ぞ知る、ですね。大先輩に、羽山伸一先生、鈴木正嗣先生、赤松里香先生などなど錚々たる！メンバーがいて、大変にお世話になりました。ではなぜアザラシではなく、猛禽類を選んだのか。当時は海棲哺乳類で職を得ることは難しかったこともありますが、崖の上からアザラシを観察していた時、目の前をそれはもうキレイな成鳥のオオワシが通過して…図鑑で知ってはいたものの、あまりの



写真1 絶滅危惧種のシマフクロウの救護。生息域内/外での保全の成果により、現在、約100つがいにまで野生個体数が回復中。



写真2 次世代への教育にも力を入れています。キラキラしたまなざしがまぶしい…精進せねば。

美しさにすっかり魅せられてしまいました。その後は、帯広から約2時間で通うことができる釧路湿原野生生物保護センターに通い詰め、齊藤慶輔代表に雇ってもらったのでした。今は猛禽類を主体としていますが、ゼニ研・大学を通じて広がった人脈や、フィールド調査、無人島などでのキャンパスキルは、職についてからもとても役立っています。オオワシの調査のためサハリンでテント生活をすることや、インフルエンザウイルスのサンプリングのためモンゴルやベトナムに長期滞在することも、楽しくて仕方ありませんでした。国内外の様々なフィールドを経験しておくことは、必ず役に立つのではないかと思います。

3. 今特に取り組んでいることや抱えているプロジェクトなどあれば教えてください

研究論文や資料、グラフなど

STOP 鉛中毒!

鳥類の鉛中毒問題に取り組んでいます。大学生の頃から鉛中毒に罹患したオオワシ、オジロワシを目にしてきましたが…。神経症状で頭を振り、嘔吐が続き、息も絶え絶えになり、そして死にゆく姿に衝撃を受けました。獣医師になった今も、手をかければかけるほど、逆に苦しませているのではないかと、何が正解なのか解らなくなるそんなジレンマにも陥りました。鉛中毒死したたくさんワシを解剖する度に、循環器不全で苦しんだ様子に、胸が苦しくなりました。鳥類の鉛中毒は、その毒性の高さ故に、深



写真3 野外で猛禽類の生態調査中。寒さに耐える体力も必須。



写真4 鳥インフルエンザの早期診断・治療を試みています。

刻な臨床症状をもたらす死に繋がります。しかしながらこの問題の解決はとてもシンプル。鉛弾の替わりとなる銃弾（銅、スチール、タングステンなど）が存在していて、切り替えるだけで解決するのですから。しかし一部の無理解なハンター、非鉛弾の流通量の少なさといった越えられそうで越えられない…政治的要因が絡むこの課題に未だ苦勞しています。

北海道ではすでに200羽以上のワシ類が鉛中毒で死亡しています。北海道庁は先んじて、大型獣猟における特定鉛弾の禁止に踏み込みました。

2000年度	エゾシカ猟における鉛ライフル弾の使用規制	【鳥獣保護管理法に基づく北海道告示】
2001年度	エゾシカ猟における特定鉛散弾の使用規制	【鳥獣保護管理法に基づく北海道告示】
2003年度	狩猟によって発生する獲物の放棄の禁止	【鳥獣保護管理法】
2004年度	ヒグマ猟を含むすべての大型獣の狩猟における鉛ライフル弾、鉛散弾の使用禁止	【鳥獣保護管理法に基づく北海道告示】
2014年度	エゾシカ狩猟時の特定鉛弾所持の禁止	【北海道エゾシカ対策推進条例】

鉛以外の銃弾でも問題なく狩猟を実施できることは、北海道のハンターが示しています。

環境省は2025年より段階的に鉛製銃弾の使用を規制する方針を示しました。2030年度までに鉛中毒発生ゼロを目指す、と。この方針を後押しすべく、北海道以外での鉛汚染状況を調べたいので、猛禽類・水鳥の血液もしくは肝臓があれば、ぜひ、ご連絡ください！

→ yukiko-w@io.ocn.ne.jp

4. 一番のやりがいもしくは楽しいことなど

フィールドに出て調査することが楽しいです。異文化のフィールドだと、なお面白い！年齢が上がり、家庭環境の制限があるため、長期のフィールドは出ることが無くなってしまいましたが…

また様々な野生動物問題の中で、ステーキホルダーと呼ばれる相手との交渉は、実際にはとても時間も手間もかかり、思うように進みませんが…日々の積み重ねの中で突破口が開けた時や協力体制が取れるようになると、それまでの苦労が吹き飛ばほどのやりがいを感じます。

5. 一番つらいところもしくは苦労するところなど

酒宴の場は好きなのですが、お酒を体質的に処理できないことが自分でも残念に思います…少しくらいは飲める体になりたかった…

また上司が自由奔放すぎるので苦労しています。でも問題の打開・解決には必要であることもわかるし尊敬もしているので、膨大な事務処理も我慢しています。



写真5 モンゴルの大草原で捕獲したオオハクチョウと。捕獲には、知恵と体力が必須。



写真6 サハリンでのオオワシ調査。手つかずの自然と思いきや、ここでも石油・天然ガス開発といった課題を突きつけられました。



写真7 鉛中毒に罹患したオジロワシ。保育器の中で、髄腔内輸液と酸素療法を受ける。

6. 今後の目標

希少種保全を実現させることももちろんですが、希少種のみならず、一般鳥類の実態把握・モニタリング体制の構築も拡充させ

たいと思っています。傷病収容は環境中で起きている事象を把握する1つのツールとなりますが、救護だけではなく、死亡原因の究明や、捕獲によるサンプリングなど、ワンヘルスの観点の取り組みを鳥類全般でできる体制作りが夢です。

7. 学会員のみなさんへ（特に学生会員に）ひとこと

私たちが活動拠点としている環境省釧路湿原野生生物保護センターは、2021年8月にリニューアルオープンし、こだわりの展示やスタッフによるバックヤードツアーを実施していますので、ぜひ釧路にお越しの際は、お寄りください。ホームページ(<http://irbj.net>)に加え、SNS (Twitter, Instagram) も齊藤慶輔代表と広報アカウントの2種類で発信していますので、ぜひチェック&いいね、を!! あ、YouTube もありますので、いいね&チャンネル登録をお願いします(笑)。また夏休みなどの長期休暇の際には、日本野生動物医学会との共催で Wildlife Educational Program (WEP) も再度、実施したいと考えています。ご参加をお待ちしております。

ご協力ありがとうございました!

書籍紹介



『ヒト、イヌと語る』

菊水健史・永澤美保 著

2023年2月
東京大学出版会 発行
192頁
定価 2,420円 (本体 2,200円+税)

浅川満彦 (酪農学園大学)

おそらく、評者のように1950年代に生まれ、いわゆる(往時はほぼ哺乳類と同義の)「動物」好きならば『人イヌにあう』(以下『あう』)を知らぬ者はいない。『ソロモンの指輪』や『攻撃』など他のローレンツ本とともに当該世代の通過儀礼的な名著群の一角を占めていた。ゆえに、『あう』は(昆虫や魚類などをモデルとしない、いわゆる高等な)「動物」に関する行動学を想起させる絶対的アイコンである。そして、『あう』へのオマージュであったことは、本書「参考文献」末尾の一番目立つ場所に書冊情報が掲載され、明示されていた(註:ただし出典は今世紀に文庫本化されたもの。初出単行本は1966年刊)。

邂逅後の深い語りあいへの移行は、所作的に自然の流れである。だからといって、単に本書を『あう』の続編的な「動物行動学」の最新研究の解説書と見なすのは早計であろう。イヌの「心」あるいはヒト-イヌ間に醸成された心的関係性などにかなり踏み込んだ意欲的作品(随筆)でもあった。

本文章題とそのキーワード的概要は次の通りである;第1章 はじまり(本書副題に記されたのイヌ個体の誕生、兄弟など)、第2章 成長(開眼、探索行動、社会化など)、第3章 新しい世界へ(強化学習、空間定位など)、第4章 イヌの世界(maternal discipline, 同調、情動伝染など)、第5章 ヒトとイヌ(認知学習、喜びの脳部位、ヒトとの共生、鏡像自己認知など)、第6章 絆の形成(オキシトシンなど)、第7章 おわり。

いずれにしても、職として行動学を志向しない者は、本書を積極的に読み込まないかもしれない(第一、評者は、いわゆるネコ派だし…)。だが、昨今、野生含む動物全般で虐待問題と向き合う必要が生じている。関連法も厳格化された。しかし、その認識・立件化はあくまでも、ヒト側に立脚し、動物側の「心」はブラックボックス化されている。つまり、被害者である動物自身の辛さ・悲しさの視点は、当然ながら、欠落しているのである。

だが、いつまでも、「当然ながら」のままでよいのだろうか。たとえば、である。本ニュースレターでもご紹介頂いたが、評者拙著(浅川 2021)で「動物の死は、自殺(自死)以外のほぼすべてにおいて、人の死と同じことが起こる」とした。早速これに対し、否定的コメントが寄せられた。すなわち、「動物でも心的原因で自殺するのではないか」というのだ。調べてみると、動物哲学・倫理学などの分野から「動物の自殺を否定する科学的根拠は無い」とするような論考は、確かに、存在した。が、これをそのまま受容するには、より詳細な動物行動学からの論証が必要とされよう(以上、浅川 2023)。そのような泥縄的事情から本書を熟読したのだ。本書には、さすがに直截的記述は無かったものの、そういった行為に至らせしめるような強力な「心」を信ずるような瑞々しい見方には触れた気がした。大変刺激的であった。

引用文献

- 浅川満彦. 2021. 野生動物の法獣医学—もの言わぬ死体の叫び, 地人書館, 東京.
- 浅川満彦. 2023. 補遺—『野生動物の法獣医学』の死因から自殺を除外した背景. 北獣会誌 67(4): 12.

賛助会員（順不同）



株式会社イーグレット・オフィス



文永堂出版株式会社

◆ 編集後記 ◆

毎回ふれずにはいられない新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の話題。人間界では感染症法5類への引き下げやマスク着用の緩和、対面式飲み会の再開など、アフターコロナの世界へと動き出しました。ただし今年は動物園動物にも新型コロナウイルス感染例が出たり、鳥インフルエンザ感染症が全国で猛威をふるうなど、人獣共通感染症の流行はもはや明確な危機として私たちに脅かしています。世界情勢で言えば、某戦争地の動物たちの受難の日々はいつまで続くのだろう…と胸が張り裂ける思いです。自然災害を含め、あまりにも大規模な脅威に対して、ちっぽけな私ができることは何だろうと途方に暮れることも。それでも各自が専門分野で活躍し、少しでも命と地球環境を守れるようにと、私も改めて決意を固めています。ちりも積もれば山となる！

HI

会員の方々へのお願い

本誌のお届け先が変更になった際は、右記の事務局にその通知をお願いいたします。本誌は宅配便業者を利用して発送しております。郵便局への転居届けは適用されません。ご転居の際は、ご通知をお忘れなきようお願いいたします。

本誌に掲載された内容の一部あるいは全部を無断で複製（コピー）、転載することを禁止します。

Zoo and Wildlife News

No.56 2023年6月

発行 日本野生動物医学学会

〒060-0818 札幌市北区北18条西9丁目
北海道大学大学院獣医学研究院
臨床獣医科学分野 繁殖学教室内
Tel・Fax 011-706-5234
E-mail wildmed@vetmed.hokudai.ac.jp

振替 00890-3-76589

編集委員長 外平友佳理
副編集委員長 井上春奈
編集委員 渡邊有希子
伊藤圭子
田中悠介
後藤拓弥
土井寛大
橋本千尋

制作 文永堂出版株式会社